

(d)移動による小型コウモリ類の生息状況の変化

B、C及びE洞窟を現在利用している小型コウモリ類は、A、Dを含むその他の洞窟へ移動できるものと考えられ、石垣島の個体群の個体数は直ちに大きな変化はないと予測された。小型コウモリ類の移動先として可能性が高いのは、現在、既に移動が確認されている洞窟と考えるのが最も現実的である。現在、事業実施区域及びその周辺の洞窟からの移動が確認されている洞窟を図-6.12.1.2(21)（その1～3）に示す。

ヤエヤマコキクガシラコウモリは、A、No.28、No.62及びNo.38-2へ移動する可能性がある。カグラコウモリは、A、D、No.8-4、No.8-6、No.11、No.12、No.19、No.28、No.62、No.64、No.67、No.70及びNo.76-1へ移動する可能性がある。リュウキュウユビナガコウモリは、A洞窟とNo.11、No.12、No.17、No.62との間で移動が確認されている。

移動先のねぐら及び餌場の条件が移動してきた個体数を受け入れることができるかどうかを検討する。

カグラコウモリ及びリュウキュウユビナガコウモリについては、先に述べたとおりB、C及びE洞窟を利用する個体数は少ないことから、これらの洞窟がなくなることによってB、C、及びE洞窟以外のねぐらの個体数が激変することはなく、受け入れ可能であると考えられる。

ヤエヤマコキクガシラコウモリについては、B、C及びE洞窟のねぐらの消失に伴い、石垣島における個体群の生息状況に変化があると考えられた。このため、移動先のねぐら及び餌場の条件について検討する。

B、C及びE洞窟は、通年にわたり、あわせて最大約470個体のヤエヤマコキクガシラコウモリに利用されており、冬期の休眠場所としては、最大約320個体に利用されている（表-6.12.1.2(17)）。

通年の利用という面から見ると、B、C及びE洞窟以外の洞窟で移動先として考えられる洞窟はA、No.28、No.62及びNo.38-2であり、それぞれの洞窟で約10～約1,920個体の変動が確認されている（表-6.12.1.2(18)）。冬期の休眠場所としての利用という面から見るとB、C及びE洞窟以外の洞窟で移動先として考えられる洞窟はA、No.28、No.62及びNo.38-2であり、それぞれの洞窟で、0～約510個体の変動が確認されている（表-6.12.1.2(19)）。

B、C及びE洞窟で通年、あるいは冬期の休眠時期に確認された個体数は、移動先として考えられる洞窟において確認されている個体数の変動幅の範囲内であることから、移動先のねぐら及び餌場の環境収容力の範囲内であると考えられ、移動先のねぐらの個体数が増加しても長期的な影響は少ないと考えられる。

また、移動先の餌場の条件について考えると、ヤエヤマコキクガシラコウモリについて、事業実施区域及びその周辺の洞窟からの移動が確認されたNo.62やNo.38-2の周辺は、於茂登岳や桴海於茂登岳を中心とした樹林が広がっており、餌場環境としては石垣島内では比較的条件の良い場所であると考えられる。